

トラック 20-1

お話というのは作り話のこと。昔々、ひとりのスルタンがいて、彼には 2 人の子、アルファティとモワネシャ、がいた。彼は、アルファティを自分の姉妹の許に送って育てさせ、モワネシャは手許に置いた。

或る日、モワネシャは学校に行く途中でアハメドという名前の少年に出逢った。彼女は彼に、どこに住んでいるかを聞き、彼は答えた。

「僕は、アルファティの家の近くに住んでいるんだ」。

「アルファティと私が姉妹だって知っている？」。

「いや、彼女は何も言わなかった」。

「アルファティのところにはよく行くの？」。

「いや、同じ町に住んでいるだけさ」。

「ねえ、アハメド、あなたのことをすごく気に入ったわ」。

「一体なぜ？」。

「わたしみたいに、いい家の男の子のようだから」。

「君は間違っているよ。僕はいい家の子じゃない。僕の父さんの仕事を知っているかい？。父さんは薪割りなんだ。薪を割ってもらふ必要のある人が父さんに会いに来て、そのお金で生活しているんだ」。

「そんなのうそでしょ！」。

「僕を信じられないなら、村で聞いたらいいいよ」。

モワネシャは或るおばあさんの家に聞きに行った。

「ちょっと知りたいのですが、同じ学校の男の子で、気に入った子がいます。彼が言うには、お父さんが薪を割っているそうです。彼はなんとと言う名前ですか？」。

「アハメドだよ。彼はあんたに嘘を言ったわけじゃなく、それは本当のことだ」。

「あの子はとてもかっこよくてすわりとしているのに、おとうさんが薪割りなの？」。

「そうさ、それが彼の父親の仕事だ」。

「あの子のお父さんを知っているの？」。

「もちろん！ 時々通りがかって、一緒に話をすることもある」。

「あの子のお父さんに会いたいな」。

そこで、老婆はスルタンの娘に住所を教えた。彼女はアハメドの父に会いに行き尋ねた。

「あなたは本当にアハメドのお父さんですか？」。

「そうだ。私だ。彼の母親もいるよ。私らに会いたいならここにいるから」。

「私は彼と同じ学校で、彼はとても素敵なんです。彼が私と結婚することを認めて下さいますか？」。

「あんたはスルタンの娘じゃないのかい？」。

「そうです。でも私は彼を愛しています」。

「あんたの父親は、娘が薪割りの息子と結婚するのを認めるだろうか？」。

「あなたが認めるかどうか言ってください。あとはお父さんと私の問題です」。

「そりゃ、とても嬉しいよ」。

「私はそれじゃ帰ります。来週また会いましょう」。

彼女は父親に会いに行き、彼に言った。

「二つ言うことがあります。私の学校で勉強している男の子がいるのですが、私は彼と結婚したいのです。だめなら、あなたは私に二度と会えないでしょう。私は死にます」。

「なんだ、それなら簡単なことだ。そいつと寝るのはお前であって私ではない。彼を呼んできなさい」。

アハメドに使いが出され、彼はスルタンにお目通りした。スルタンは彼に尋ねた。

「どうやって私の娘に会ったのかね？」。

「僕たちは同じ学校にいるというだけです。僕は彼女をからかったり、困らせたりしません。だって、彼女がスルタンの娘だということを僕は知っています。僕は彼女に無礼なことを言ったことはありません。問題を起こしたら、僕は自分の墓を掘ることになるのを知っているからです。彼女の方から僕に会いに来て、僕が彼女の姉妹を知っているかどうか尋ねました」。

「本当に彼女とは何もなかったのだな？」。

「どうして僕がスルタンの娘と関係を持つとうなんてするでしょう？僕は自分の身を守ります。彼女が私に結婚を申し込んだので、僕は怖くて震えています。どうして、スルタンの娘が僕と結婚することを望むのでしょうか。僕の父さんは薪割りですよ」。

「お前は彼女と結婚することを受け入れるか？」。

「はい、いいです」。

「では、両親を呼んで来なさい」。

両親はスルタンの許にやって来て、スルタンは尋ねた。

「あなたたちがアハメドの両親か。結婚を待つ間、アハメドは今日から私の大臣だ。今後は我々は同じ家族同士になるのだから、お互いに知っておく必要がある。これは私の娘で、こちらが息子だ。付き合いを絶やさないようにしないとイケない」。

一ヶ月後、スルタンは結婚式を挙げるために、アハメドの両親を呼びにやった。道すがら、両親はアハメドについて話し合った。父親は妻に尋ねた。

「お前は、アハメドがスルタンになって、大臣の椅子に座ると思うかい」。

「戯けたことをいうんじゃないよ。スルタンが薪割りの息子に国を任せるなんて考えているのかい」。

「子供を愛しているなら、何でも出来るさ」。

「それでも、そんなことはないよ。スルタンの位を薪割りの子に託すなんて！」。

「神を信じて祈るしかない」。

結婚の日が近づき、「アハメドがスルタンの娘と結婚する」と村人に告げられた。人々はこの報せについてうわさをした。

「村の金持ちや、良家の息子たちを差し置いて、薪割りの息子がスルタンの娘と結婚するとはね」。

その中に金持ちの老人がいて、こう言い出した。

「アハメドの首を刎ねた者には褒美をやる」。

この報せがスルタンの許に伝えられた。

「あなたの大臣のひとりがアハメドを殺そうとしているのをご存知ですか？」。

スルタンは尋ねた「お前は、それが誰か知っているのか？」。

注進に及んだ者は頷いた。そこでムゼ・アリを呼びに人が遣わされた。

スルタンは、南京袋の塩を取り、地面にまいた。彼はムゼ・アリの衣服を剥いで跪かせ、尻を棒で打った。スルタンは彼を日没まで、翌日の夜明けまでそのままひとりに捨て置いた。ムゼ・アリは立とうとしたが出来なかった。足が塩に触れて麻痺していたのだった。スルタンは彼を木の幹につないで置くよう命じ、彼は数日後に死んだ。

豪勢な結婚式が祝われ、すべての有力者が出席した。スルタンは自分が着ていた王位の盛装を取り、アハメドに着せて言った。

「これからはお前がスルタンだ。私は、お前が望むならお前の後見人でしかない。そして、お前の妻は大臣になる」。